

博多発掘40年のあゆみ

平成29年9月16日

於 福岡市埋蔵文化財センター

池崎 譲二

博多発掘前史

発掘開始前後の文化財保護行政の状況(資料1)

発掘前の遺物発見史(資料2)

博多発掘開始当初の状況

地下鉄路線内遺跡の調査 西新町遺跡、福岡城堀石垣(,76.8～)

(参考 この年、韓国木浦で新安沈没船発見)

地下鉄路線内「祇園町遺跡」の調査(,77.12～,84.4)

博多駅・築港線(大博通り)拡幅に伴う調査(,82.11～,87.2)

周辺開発に伴う調査

現在まで214次の調査

刊行報告書 博多1～157 地下鉄関係IV～VII 築港線関係1～5

博多遺跡群に関する出版物

,84「中世の博多」(『古代の博多』中山平次郎、九州大学出版会)

,88『東アジアの国際都市 博多』(川添昭二編「よみがえる中世1」、平凡社)

,06「発掘調査から見た中世都市博多」田上勇一郎(『市史研究ふくおか 創刊号』
福岡市博物館市史編纂室)

,08『中世都市博多を掘る』大庭・佐伯・菅波・田上編 海鳥社

,09『中世日本最大の貿易都市 博多遺跡群』大庭康時 シリーズ「遺跡を学ぶ」61
新泉社

,15「博多唐坊の研究」亀井明德 亜州古陶磁学会

博多遺跡群に関する研究会

遺跡立地研究会,86～,91 46回の研究会開催

,98『福岡平野の古環境と遺跡立地』小林茂他編 九州大学出版会

博多研究会

,92～『博多研究会誌1～13』

中世都市研究会

,17.9.2~3『港市としての博多』中世都市研究会博多大会

「博多の最新発掘調査情報」 中尾祐太

「貿易陶磁器と国内流通」 大庭康時

「防塁関係遺構と博多の発展」 大塚紀宜

「技術導入の窓口、博多」 比佐陽一郎

博多遺跡群に関する展示

福岡市博物館・埋蔵文化財センターで常設展示

(部門別展示室では随時個別テーマに沿った展示を行なっている。)

福岡市埋蔵文化財センター

,17 「博多遺跡群出土品重要文化財指定記念特別展 中世博多の考古学」

福岡市博物館での博多関連特別展示

,93 「堺と博多」展 (堺市博物館では同年「博多と堺」展を開催)

,03 「チャイナタウン展」

国内外での博多遺跡群出土資料の貸し出し展示

東京国立博物館、九州国立博物館はじめ各地の博物館特別展などに随時貸し出し

,06 韓国、木浦 国立海洋遺物展示館「新安船と東南アジア陶磁交易」

新安沈没船発掘 30 周年記念特別展

,11 韓国、釜山市立博物館「一土を捏ねて玉を造るー 龍泉青磁展」

街中での展示

,90 大博通りシンボルロード「歴史の散歩道」

全国街路事業コンクール特別賞受賞

博多駅地下通路 F ギャラリーでのテーマ展示

(埋蔵文化財センター博物館実習生による)

各調査地点の原因者による顕彰碑など

,01 博多小学校石塁遺構展示室

市域内における博多関連遺跡の発見と発掘

,82 地下鉄建設にともなう箱崎遺跡の発掘、周辺開発に伴う調査開始

,84 那津官家の発見

,87 鴻臚館遺構の発見、発掘開始

,07 「鴻臚館跡発掘 20 周年記念特別展 古代の博多 鴻臚館とその時代」

福岡市博物館

,17 「発見 100 周年記念特別展 よみがえれ! 鴻臚館 一行き交う人々と唐物ー」

福岡市博物館

福岡市の文化財行政(前史)と博多遺跡群40年のあゆみ

西暦	地下鉄	築港線	周辺開発調査回数	件数	出来事など	
1968	S. 43				文化庁設置	
1969	S. 44				福岡県・福岡市に文化課設置 (専門職5名)	
1970	S. 45				金隈遺跡の調査	
1971	S. 46				九州自動車道、新幹線、板付遺跡の発掘	
1972	S. 47				福岡市歴史資料館開館 (専門職8名)	
1973	S. 48				野方遺跡の発見、調査 (専門職11名)	
1974	S. 49				四箇遺跡の調査 (専門職12名)	
1975	S. 50				有田遺跡調査開始 (専門職13名)	
1976	S. 51	試掘			地下鉄関係調査開始 西新町・福岡城 (専門職16名)	
1977	S. 52				「緊急発掘された福岡平野の歴史」展	
1978	S. 53	本調査	1次	1		
1979	S. 54		2～6次(立会・試掘各1件)	5		
1980	S. 55		7～11次(試掘2件)	5		
1981	S. 56		12～18次(試掘3、トレンチ1件)	8		
1982	S. 57	箱崎遺跡	1次調査		福岡市埋蔵文化財センター開館	
1983	S. 58		2次調査	19～24次	5	
1984	S. 59	P2出入口	3次調査	24～25次	2	那津官家発見
1985	S. 60		4次調査	26～29次	4	(専門職30)
1986	S. 61		5次調査	30～35次(外部調査団1件)	6	福岡市埋蔵文化財センター増築完成
1987	S. 62			36～37次	2	鴻臚館遺構発見
1988	S. 63			38～45次(立会調査1件)	8	
1989	S. 64			46～64次(立会調査2件)	19	アジア太平洋博覧会開幕
1990	H. 2			65～70次	6	福岡市博物館開館、福岡市歴史資料館閉館
1991	H. 3			71～76次	6	
1992	H. 4			77～79次	3	
1993	H. 5			80～83次	4	
1994	H. 6			84～88次	5	
1995	H. 7			89～96次(立会調査1件)	8	
1996	H. 8			97～101次	5	
1997	H. 9			102～108次(立会調査1件)	7	
1998	H. 10			109～113次	5	石塁遺構発掘(博多小建設予定地)
1999	H. 11			114～123次	10	(専門職43)
2000	H. 12			124～129次	6	
2001	H. 13			130～137次	8	博多小石塁遺構展示室開館
2002	H. 14			138～141次	4	
2003	H. 15			142～146次	5	
2004	H. 16			147～151次	5	
2005	H. 17			152～159次	8	
2006	H. 18			160～171次	12	
2007	H. 19			172～181次	10	
2008	H. 20			182～188次	7	
2009	H. 21			189～190次	2	
2010	H. 22			191次	1	
2011	H. 23			192次	1	
2012	H. 24			193～194次	2	
2013	H. 25			195～200次	6	
2014	H. 26	203次		201～204次	4	
2015	H. 27	地下鉄				
2016	H. 28	3号線		205～210次	6	
2017	H. 29			211～214次	4	博多遺跡群出土品重要文化財指定

53 地下鉄路線内遺跡調査 <49~51>

1 調査に至るまで

最近市内の交通の渋滞が一層はなはだしくなったため、地下鉄の建設が計画された。計画当時、路線内の埋蔵文化財の調査が問題となった。路線内遺跡の重要度を討議する必要があるながら、当初の段階ではなされなかった。次に、調査者の確保が問題となる。財政緊迫化の折、職員定数増は困難であった。この重要な二点について、高速鉄道建設当局と教育委員会との間で十分協議されないまま地下鉄建設は見切り発車された。そのため現状保存にせよ、記録保存にせよ「周知の遺跡」が「不時発見」として処理され、地下鉄建設計画が意に反して大幅な変更をせまられるということになる。この過ちを、開発にたずさわる人も文化財行政を行う人も、市民の利益を守る立場から、充分反省することは将来の行政にとって無意味ではない。

開発と文化財両者の協議がなされる事なく発進した地下鉄建設は、1976年5月福岡城の内堀外壁石塁（石垣）発見で、当然のことながらつまづくことになる。ここで、埋蔵文化財担当職員の定員増がなされ、ようやく調査体制がどうにかととのい、建設工事に遅れを取りながら、文化財の調査も「うさぎとかめのかけっこ」よろしく走り出した。

路線内の遺跡は過去のデーターから、西から西区役所前・藤崎遺跡、修猷館高校前・西新町遺跡、福岡舞鶴城の内堀外壁石塁（石垣）、薬院新川に続く福岡と博多を分けた石垣（県庁前）、平安時代に盛行したといわれる袖ノ湊（貿易港）・宋人百堂・聖福寺等に関係ある祇園町遺跡（旧大丸デパートから博多駅一帯）、筥崎宮前遺跡、西鉄貝塚駅附近の元寇防塁等々がある。調査はこの内10パーセント程度を消化したに過ぎない（1977年5月現在）。途中経過を以下にのべる。

2 遺跡調査の途中経過

a 藤崎遺跡（西区西区役所前）

1)過去のデーター 1912年に川庄喜彦氏宅地内で古墳時代初期の箱式石棺発見。副葬品は鉄製素環頭大刀・さんかくぶちりゅうこぎょう三角縁竜虎鏡。1919年に村上研究所敷地内で弥生時代前期の甕棺墓数基と古墳時代初期の方格渦文鏡を副葬した箱式石棺墓を発見。昭和初年には現在の歩道橋付

近から弥生時代の甕棺墓群を発見。

2)調査経過 道路拡幅、埋設物移設、地下鉄工事前中間鋼杭構築等に先行して調査。調査対象面積4000㎡の内約400㎡の調査で、過去のデーターを裏づけるように弥生時代の共同墓地が見つかった。甕棺墓30基、石棺墓2基。

b 西新町遺跡（西区西新、修猷館高校前）

1)過去のデーター 戦前には修猷館高校グラウンド付近から弥生時代の甕棺墓が出土。この地で出土した弥生時代終末の土器は「西新町式土器」とよばれ、広く学界で知られている。1973年にマンション建設工事中、弥生時代の甕棺墓を発見。

2)調査経過 地下鉄工事前の路面電車軌道敷撤去にあわせて調査。弥生時代中期の甕棺墓13（ひとつは同後期、ひとつに南方産ゴホウラ製貝輪2個、ひとつにガラス製小玉を副葬）と弥生時代後期終末期から古墳時代にかけての住居址30軒を発見。対象面積6000㎡の内2000㎡を調査終了。

c 福岡城内濠外壁石塁-石垣（中央区荒戸・大手門・平和台・赤坂）

1)過去のデーター 奈良・平安時代には大宰府鴻臚こうろ館が現城内（平和台球場付近）にあり、大陸からの賓客をもてなしたという。これを裏づけるように、大量の瓦や大陸系の陶磁器が発見されている。万葉にうたわれた「荒津崎」がどこなのか興味をひく。

慶長6年（1601）から黒田如水、長政父子により福岡舞鶴城が築かれる。現「福岡」の地名はここからおこる。城内の石垣は平尾・高宮の古墳の石を使用し、内濠の石は西ノ浦の唐泊より運んだという。濠の深さは外壁部で水面より1間、中央部で3間と伝える。福岡城に外濠は存在しない。恐らく博多湾がそれにかわるものであったろう。

1910年に福博電鉄開通のため内濠を埋める。

2)調査経過 1976年4月、荒戸地区の地下鉄工事がはじまり、5月に内濠外壁石塁にぶつかる。本格的調査は同年12月、高鉄局の要請に応じて始める。荒戸から赤坂まで全線にわたって石垣が確認された。

発見された石垣のうち保存状態の良好なのは、下の橋入り口、福岡家庭裁判所前、サントリー福岡支店前、

赤坂門バス停前等である。石垣は路線内をジグザグに進む。90度の角をなす部分が保存状態が良く、石垣築造の基準点として入念に築かれたのであろう。この角々が石垣築造工事の工区を示しているかもしれず、重要である。現在、石垣の裏込め調査・岩石鑑定用の岩石標本採集・石垣壁の側面図作成を行っている。鴻臚館に直接関係はないが、平和台から赤坂門にかけての石垣の裏込めから古代瓦・中国製青磁・須恵器・土師器等々が検出されている。

内濠外壁石塁(石垣)の保存については、現在(1977年6月)、高速鉄道局と教育委員会とで、現状保存・移築保存等協議中である。保存することは「城として、濠を除けば歴史的戦略上の意味をなさない」ことから明らかである。市民の憩いの場である福岡城舞鶴公園全体の中で地下鉄路線内の石垣をみるならば、膠着している石垣保存論争に活路が開けると考えるのだが……。 (その後、一部分の現状保存が決まった。)

d 祇園町遺跡(博多区祇園町)

1)過去のデータ 平安時代にはこの地に、当時の貿易港「袖の湊」(呉服町付近)に渡来した宋商人が住んでいたと言われる(宋人百堂)。鎌倉時代の建久6年(1195年)に宋人百堂の跡地に栄西禅師が聖福寺を建立。江戸時代から近年まで、この地で多くの大陸系青磁、銀製品、漆器等が発見されている。特に聖福寺境内出土の中国越州窯系磁器、水注は有名。弥生時代の遺物や甕棺墓も当地から博多駅にかけて発見されている。

2)調査経過 1977年3月に試掘。注目されていた通りの結果を得る。最下層に弥生時代から古墳時代にかけての石棺墓、中層に平安から鎌倉時代にかけての中国青磁、上層に近世磁器が見られる。今後の本調査で博多の歴史を語るにふさわしい姿をあらわすであろう。

3 地下鉄遺跡調査の意義と問題点

弥生時代以後の考古学的調査研究はこれまで、農耕を主にした人々の生活の跡をたどることに重点がおかれていた。海洋で生活した人々の生活はさほど重視されていなかったきらいがあり、彼等の生活が語られるにしても、海外交渉を意味する珍品を通してでしかない。こうした点から、今回の調査の重点を漁撈民の生

活の把握に置きたい。

原始・古代史は土器をもって語られる。一つの土器型式が時代を決定し、地域文化の領域を想定させる。土器型式の消長を知ることは考古学研究の基礎作業である。この作業がかかえている重要な問題の一つに弥生土器から古墳時代の土師器へのうつりかわりがある。西新町遺跡では、福岡平野の弥生土器から生まれたとは思えない畿内・瀬戸内系の土師器があまりにも多い。海を越えて直接運ばれて来たのか、形だけをまねてこの地で作られたものなのか。この問題を解決する意義は大きく、大和政権の福岡地方に対する支配・影響の過程を探る上でも重要である。幸い西新町遺跡は砂丘上にあつて保存状態がよく、問題解決の一級の資料を提供するであろう。

弥生時代以来、郷土博多は海外交渉の長い歴史をもっている。交渉によってもたらされた大陸の文物が、いつ、どのような人々に、いかにしてもたらされたのか、興味はつきない。この問題を解明する上で、地下鉄路線内遺跡群を忘れることはできない。古代中国製の銅鏡を出す藤崎遺跡や、中国商人の居留地宋人百堂の存在を予想しうる祇園町遺跡はこの問題に答えるであろう。

古代博多の砂丘上に、文化の伝導者海洋民の生活が眠っている。この砂丘を地下鉄は掘り進む。現代人の騒々しさに彼らが心地良い眠りからさめ、われわれに海の歴史を雄弁に語りかけることを期待する。

(折尾 学、浜石哲也、池崎謙二、山崎龍男)

博多の遺物発見の歴史は、聖福寺境内を中心に江戸時代にさかのぼる。

1. 元禄11 (1698) 年 聖福寺子院瑞応庵の墓地で壺が出土し、中に金器、花銀、金花銀、金銭、銀銭、団金、金で作った禽獸蟲魚などあり、これらを改鑄して二百三十四両を得る。
(文献1・2・7・8)
2. 宝永 (1704~1710) 年間 聖福寺子院虚白院の地より朱椀五十具が出土。每具四個からなり、二つの甕に入っていた。いずれも散逸して現存しない。
(文献7・8)
3. 享保元 (1716) 年 瑞応庵の墓地石塔修補中、多量の金銀器が入った壺を発見。元禄11年と同様の遺物で、金二貫八百七十匁、銀五貫三百二十匁一分を得て、修葺の資となした。出土した法馬の一つには、「徑歴郭徳潤 行宣政院福建分院 提調官副使側失監」裏面に、「客商謝福 花銀肆拾捌両重 辨驗銀匠彭禎」と刻字されていた。現存しない。
(文献1・2・7・8)
4. 享保8 (1723) 年 瑞応庵の墓地が盗掘され、遺留した銀器一個の中に、白銀九貫六百六十匁、銀製珍器量四百貫、法馬七十三個が出土。法馬の大なる物は五百匁もあり、正面に「客商謝福 辨驗銀匠彭禎 華銀五拾両重」裏面に「金花銀」などの刻字が残されていた。
(文献1・2・8)
5. 宝暦8 (1758) 年 天得庵の竹林開墾の際、南京窯の瓷器大小27個が出土。現存しない。
(文献1・2・7・8)
6. 明治40 (1907) 年 上奥堂町の佐藤半次郎氏宅の井戸掘削中、地下約16尺より碇石が出土。櫛田神社に奉納されている。
(文献5・12)
7. 大正 (1912~1925) 年間 魚町、西町下、行ノ町、矢倉門など博多各地で、井戸掘削時に青磁、白磁、瓦などが出土。天神近辺でも西鉄電車駅、平岡氏宅から青磁、白磁が出土。これらは中山平次郎博士の確認である。また、中洲玉屋デパート西側で、弥生式土器、蛸壺などとともに石鍋、塩壺が出土。
(文献3)
(文献11)
8. 大正4 (1915) 年 中山平次郎博士が福岡城内で奈良時代古瓦の大量散布地を発見し、大宰府鴻臚館址であるとの確認を得る。
(文献3)
9. 昭和7 (1932) 年頃 博多港沖浚渫中、碇石とともに「張綱」銘墨書のある天目碗 (Fig.10) や中国銭多数が発見される。九州大学蔵。
(文献4・5・7・8・10)
10. 昭和24 (1949) 年 福岡城内の平和台野球場造成のため、鴻臚館址と思われる地点を破壊。この前後、高野孤鹿、大場憲郎氏らによって古瓦、陶磁器が多数採集され、のちに、越州窯青磁が含まれていることを小山富士夫氏が確認。福岡市立歴史資料館、出光美術館、九州歴史資料館蔵。
(文献8・9・10・13)
11. 昭和27 (1952) 年 呉服町交差点の東邦生命ビル (旧大丸百貨店、現エレデ寿屋) の建設工事中、陶磁器、蛸壺、弥生式土器片、銅銭 (五銖銭を含む) など多量の遺物が出土。後に周辺の山口銀行福岡支店、富岡生命ビル等の建設工事でも同様の発見があった。
(文献6・8)
12. 昭和20年代 (1945~1955) 聖福寺境内の山門と大宝殿との間の工事中に地下2m付近で、水注一個と皿一枚をそれぞれ発見。九州大学蔵。
(文献8・10)

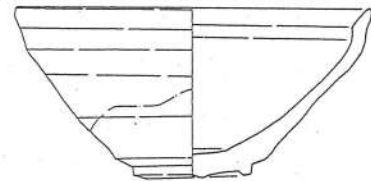


Fig. 10 博多港沖引揚げの天目碗
(文献8・9・10・13)

13. 昭和33 (1958) 年 今津勝福寺西の砂丘より、約二百体の埋葬人骨が発見された。百九点の陶磁器や鉄鍋、鉄鎌などが二宮八郎氏によって採集された。人骨は体部と頭部が別々に、埋葬され、異様な埋葬形態であることが注目された。^(文献10)九州歴史資料館蔵。
14. 昭和48 (1973) 年、天神フタバビル建設工事中地下5mから碇石が出土。福岡市埋蔵文化財センター蔵。
15. 発見年代は未確認であるが、筥崎宮境内より白磁碗の完形品一点が出土し、宝物館に所蔵。

博多遺物発見史関係文献目録

- (1) 貝原益軒「筑前国続風土記」
- (2) 津田元願・元貫「石城志」明和2 (1765) 年・大正10 (1921) 年刊
- (3) 中山平次郎「古代の博多」昭和59 (1984) 年 九州大学出版会
- (4) 山本博「博多湾出土遺物と元寇役への新資料」『都久志三号』昭和 (1932) 年
- (5) 川上市太郎「蒙古軍船碇石」(『元寇史蹟(地之巻)』福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第14輯) 所収 昭和16 (1941) 年
- (6) 奥村武「博多袖の湊遺跡出土文化財について」『うわき25-9~12』所収、昭和34 (1959) 年・『博多袖之湊址発掘文化財目録』昭和28 (1953) 年 報告、福岡県教育庁蔵書
- (7) 小島文鼎「聖福寺史」昭和39 (1964) 年三宅安太郎訂、聖福寺文庫刊行会
- (8) 岡崎敬「福岡市(博多) 聖福寺発見の遺物について」『九州文化史研究所紀要13』昭和43 (1968) 年所収
- (9) 高野孤鹿「平和台の考古史料」(プリント) 昭和47 (1972) 年
- (10) 亀井明德「博多の中国陶磁地図(上)・(中)・(下)」日本美術工芸447~449 昭和50~1 (1975~6)
- (11) 咲山恭三「博多中洲ものがたり 一前編一」昭和54 (1979) 年
- (12) 松岡史「碇石の研究」『松浦党研究』昭和56年(1981) 所収、松浦党研究連合会
- (13) 池崎讓二・森本朝子「福岡市立歴史資料館収蔵の高野コレクション」 弓場知紀「出光美術館の高野コレクション」『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ福岡城址一内掘外壁石積の調査』所収、昭和58年(1983) 福岡市教育委員会

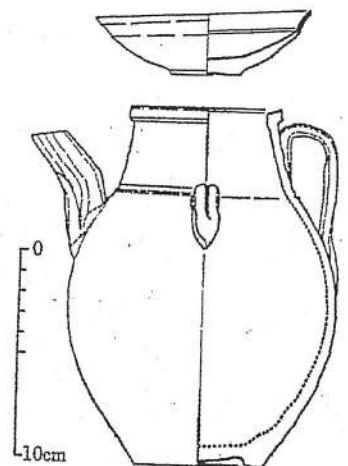


fig. 11 聖福寺内出土蔵骨器